

生活再建部会での論点に関する委員の意見・提案

●「仮の町」の形態について

1. 「仮の町」の整備について、集中型、分散型それぞれのメリット・デメリットをどのように評価するか。

【集中型に関する意見】	委員会/部会
○当面の生活拠点では仮の町は必要。暮らしが長期化することも考え、役所、学校、住宅、老人ホームといったものを1カ所につくるべき。	第3回委員会
○役場、学校、老人ホーム、役場職員の仮設住宅等を含めて全部まとめていわき市につくればよい。	第4回委員会
○仮の町を1カ所集中型で進めるのであれば、相当の土地、予算等壮大な計画が必要となるが、それには国の支援と覚悟がないと実現不可能。このままでいけば、町民は分散型で既存の町の中に埋没して住むことになってしまう。	第5回委員会
○学校の立場からは、将来の双葉町を担う子どもたちのため、町の伝統文化の伝承のため、集中型でどこかに拠点を置くべき。	第1回生活再建部会
○自分の考える集中型とは、拠点型ともいうべきか、学校等を立ち上げる拠点がある一方で、例えばつくば・加須など拠点以外にも各地域である程度安定的な生活をする町民がいることを想定。	第2回生活再建部会
○商工会の立場からは、これまでの商売も双葉町、双葉郡だから成り立っていたという面はあり、集中型の方がいい。	第1回生活再建部会
○7000人の町民を満足できるような集中型は、現実的ではないということも直視すべき。	第2回生活再建部会
○伝統文化にしてもコミュニティにしても、仮の町が1カ所であれば話は早い。しかし、実際には分散型にならざるを得ないだろうということで難しい。	第3回きずな部会
○仮の町は、時間が経てば経つほど、箱物を造って1カ所に集積することは難しい。	第1回委員書面意見
○町民がまとまって住める場所、町としての機能があるコンパクトシティ、町人口から考えるとできれば1カ所と考えるが、2カ所もやむを得ない。	〃
【分散型に関する意見】	委員会/部会
○仮の町をどこかにつくる場合、場所をどう確保するのか、ある場所が欲しいといっても受入先はどうかという問題がある。そうした問題を考慮すると、コンパクトな町を複数個つくった方がよいのではないか。	第1回委員会
○仮の町を考えた場合、相手のあることでもあるため、どうしても分散型になってしまうのではないか。	第1回生活再建部会
○避難先ではすでに就職し、子供たちも学校に通っている現状では、1カ所に集中した場所に町民が移ることができるだろうか。	〃
○現実的な問題として、集中型を目指しても全ての町民が集まることはできないため、分散型であるべき。	〃
○仮の町は、本拠地を1カ所に決めて役場・学校・病院等の町機能を設ける一方で、そこに移ることができない町民に対しても一定規模のある各地域を拠点として認め、面倒をみるべき。	〃
○町民が全国に散らばり、それぞれ自立しようとしている中では、どこかにまとまって集まることは難しく、分散型にならざるを得ない。	〃
○避難時期が長くなれば避難先での生活基盤ができ、また、放射能への不安等諸々の制約条件を考えれば、分散型でそれぞれの地域で生活した方がよい。	〃
○仮の町についても、どこか1カ所に町があってもよいが、各地にいくつかの分散した小さな拠点を設けてもよいのではないか。	〃

○県より全国の自治体に対して、県からの避難者新規受入に係る年内終了を依頼する通達が発出されたが、このままでは県外の分散型は現在避難している町民でしか進めなくなってしまう。	第2回生活再建部会
○集中型が理想なのはわかるが、受入自治体との軋轢が生じることを認識すべきあり、軋轢の少ない分散型で進めていくべき。	〃
○町民にも自立志向が進んできている中、集中型では町民にとってそこまでの移動に負荷がかかるため、現実的には分散型にならざるを得ない。	〃
○本委員会委員より提案のあった仮の町のイメージ図は大変良く、各拠点の中にも役場・福祉施設・学校等を有する大きな拠点地があり、そこから枝分かれする形で役場支所・コミュニティ機能を有するサブ拠点を3か所くらい設置し、各々が結ばれているというアイデアは多くの委員の意見をまとめた形になっている。	〃
○本委員会委員より提案のあった分散型の仮の町のイメージは、現実的にも進めやすいのではないか。	〃
○いわきの方で例えば双葉町の7000人の仮の町をつくる、そんな場所を見つけることはほとんど不可能に近い。	第3回生活再建部会
○拠点というのは1カ所に全部集まるのではなくて、今の状況から言えば、県外も含めて何カ所かに双葉町の拠点をつくる。	〃
○仮の町の拠点も一つではなく、いくつかの拠点を作り、早く町民の生活が安定できるようにすべき。	〃
○仮の町は、集合住宅でなくとも大字単位で住めるようにできればいい。集合プラス分散型という形でも仕方ない。	第2回ふるさと再建部会
○仮の町は、1箇所ではなく、分散して作った方がよい。	第1回委員書面意見
○仮の町は1つの場所に設定せず、県内・県外と複数個所にあっても良いのではないか。	〃
【その他意見】	委員会/部会
○双葉町に新興住宅地を開発したときにも大きな問題が数多く出てきた。大きな仮の町をつくるとしたら、我々では想像ができない大きな問題が出てくるのではないか。	第1回委員会
○町での生活がどうなるのか、将来の町を支える子供たちをどう育てていくのかに対する理念や見通しが無い限り、仮の町をつくっても住もうという人はごく一部になってしまうのではないか。	〃
○仮の町に誰が戻ってくるのかを考えないと、仮の町は理想論になってしまう。	〃
○双葉町に戻れるかどうかわからないので、そこを決めてから仮の町の議論を進めるべきではないのか。	〃
○仮の町構想をゼロから創ることに違和感がある。双葉町にあった歴史、文化などを基にコミュニティを創り上げるべきではないか。	〃
○仮の町は本当にできるのか。受け入れがうまく進んでいないと感じられる。	第4回委員会
○仮の町では、町民の考えに少しでも近づけるように、責任者である国、東京電力または福島県がきちんとやってほしい。	〃
○仮の町と学校の再開は切り離して考えて、学校の再開やコミュニティをつくるのが急ぐべき問題。	〃
○集中型にしても分散型にしても、皆が力を合わせ、いつかは双葉町に帰るとの理念があるからこそ、仮の町もつくっていけるのではないか。	第5回委員会
○町に帰れない現実を前に、仮の町の議論はある面では意味がなく、賠償問題が解決すれば、町民一人ひとりが各々の避難先にとけ込み、新しい生活を築いていくことになるのではないか。その中で、双葉町の存在を維持するためには、町単独ではなく双葉郡全体で取り組んでいくこともあり得るのではないか。	第1回生活再建部会
○仮の町は必ず無くなるため、受入自治体も認めず、商売に来る人もいないのではないか。	〃
○仮の町は30～50年は続くことを前提に議論する必要がある。すぐ無くなる町、最後に更地になる町には誰も商売も来ない。	第2回生活再建部会
○いわきに行こうが、郡山・福島に行こうが、それはあくまで「仮の町」。果たして人と人との絆を今後ずっと維持していけるのかと言ったら、それは難しい。	第3回きずな部会
○町外コミュニティづくりは、①仮の町拠点を1つにする、②仮の町を県内外に分散させる、③仮の町をつくらない、の3パターン。その中で、町民が双葉町民である誇りと自覚を持てる様、安心して生活できる住民サービスを提供できるかにある。	第1回委員書面意見
○新生双葉町創設は現実的に不可能。現役世代の大半は、新しい土地に移住するとは思われない。せいぜい仮設を纏めてどこにも行けない人や、体の弱い人達が移住する程度で終わるのではないか。	〃

○仮の町が不可欠との答えが先に決まっている点に疑問。放射線の影響から「仮の町」＝「骨を埋める覚悟、終の棲家」の可能性が高く、選択肢(仮の町、避難先への定住、新たな土地に新双葉町、過疎の町への集団移住)は多様であってよい。【再掲】	〃
○仮の町については、住民票を避難先と双葉町と二重にもつというのが現実的。	〃
○「時限的」まちを“つくる”ことを前提にした話し合いが必要。居住環境、就労、インフラ、教育等ある程度の議論を経たら、受入自治体の理解を得て、とにかくスタート(町づくり)することが大切。	〃
○早急に仮の町づくりを進めなければ、未来の双葉町は成り立っていない。	〃
○仮の町は果たして必要なのかどうか疑問。どれだけの人数が集まり、世代の構成はどうなのか。仮の町に住んでも、生活が成り立たなくてはしようもない。それには町の立地場所に大きく影響される。	〃
○復興まちづくり＝仮の町が町民の終着であるとの錯覚をしがちだが、仮の町は町民のハッピーへつなげるベストな選択肢であろうか。	〃
○若者層のことを視野に入れて考えなければ、仮の町を作ったとしても、数十年後には超高齢化を課題とした過疎地域となり、街は衰退する。	〃
○仮の町について、今まで積み重ねられてきた歴史や文化、人と人との繋がりを捨象した町では、双葉町を称する意味がない。	〃
○仮の町に実際に住みたい町民を正確に把握し、そこに生活する人々の実態と求めているものを汲み取った上で、現実と理想とを折衷して構想を立てていくべき。	〃
○仮の町については具体的な諸内容の要求よりも、最初に双葉町コミュニティと関係した概念規定についての議論・検討・モデル化が重要。	第2回委員書面意見

2. 「仮の町」は、避難生活が長期化することを視野に入れて、単に帰還までの仮の拠点として考えるのではなく、
 ・双葉町へ帰らないと決めた方の生活の本拠(新たなふるさと)としての「仮の町」
 ・新たに双葉町のコミュニティに移り住む町外の方も受け入れていく「仮の町」
 といった考え方も必要ではないか。

【仮の町の在り方に関する意見】	委員会/部会
○若者は福島県内からは離れているのが現状なので、次世代のことを考え、新生双葉町をつくるべき。【再掲】	第4回委員会
○将来的にもぬけの殻になるような町をつくるのではなく、長く住むことができ人が住みたいと思えるような魅力的なまちづくりを目指していくべき。	第1回生活再建部会
○仮の町ではなく、新生・双葉町として、福島県でなくてもよいから、放射能がなく温暖な場所に拠点をもち、何十年先を見据えた新たなまちづくりを考えるべき。	〃
○事故以来、家族がバラバラになり、多くの人々が厳しい避難生活を強いられている現状の中で、そうした人たちの生活を少しでも事故前の生活に近づけられるような、希望の持てる町づくりを目指すべき。	〃
○仮の町を議論する際、戦後、開墾制度の下で至る所で開発が行われた後に限界集落を生み出してしまったという事実にも留意すべき。	〃
○将来的に人口減少が避けられない中で、仮の町もそれを前提として無駄にならないような制度設計をすべき。	第2回生活再建部会
○避難先での生活が落ち着きつつある中、役場機能移転が動き出したこともあり、まずは役場機能を中心としたまちづくりを行い、一歩でも前に進むべき。	〃

●「仮の町」に必要な機能について

1. 「仮の町」の場所の選定に当たって重視すべき条件には、どのようなものがあるか。

例えば、空間放射線量の程度、気候風土の類似性、交通の利便性といったことをどの程度考慮すべきか。

【具体的な場所に関する意見】	委員会/部会
○双葉町からの避難者が一番多い所はいわきだが、それはいわきが双葉町に似ている環境だからということも考慮しなくてはいけない。	第2回委員会
○役場、学校、老人ホーム、役場職員の仮設住宅等を含めて全部まとめていわき市につくればよい。【再掲】	第4回委員会
○住民が集まりやすい所は郡山。郡山だと、いわき、福島、仙台、山形、会津からも、南からも北からも良い場所になる。	第1回生活再建部会
○福島空港や福島未来博の跡地などの場所は提供してくれないだろうか。	〃
○現在、つくばの公務員宿舎に住んでおり、周りは空き家も多く、多くの町民を受入れる余地はあるため、新町双葉の一つとして検討すべき。	〃
○いわきなど受入先との関係では難しいものがあるし、大人数を受け入れられる土地は人が住まないような場所になってしまう。	〃
○いわきの方で例えば双葉町の7000人の仮の町をつくる、そんな場所を見つけることはほとんど不可能に近い。【再掲】	第3回生活再建部会
○役場を中心としたいいわき地区、それ以外の県内拠点(郡山・福島・白河等)に加えて、放射能への不安を抱える町民のための県外拠点(関東圏内)の3カ所くらいに拠点を設けるべき。	第2回生活再建部会
○茨城県つくば市は、住環境も良く、教育事情も小中一貫になり、緑があり、国家公務員宿舎が沢山空いている。	第1回委員書面意見
○原則として福島県内としたい。集中型の場合、郡山地区にしたい。分散型の場合、会津、白河、須賀川、郡山、いわきの5つに分散。	〃
○今般(役場機能移転について)県に戻られる決意をうれしく思うが、私共仮設(勿来)に余地があるのか。	第2回委員書面意見
【場所選定の条件に関する意見】	委員会/部会
○子どもを持つ母親として子供の被曝の問題が一番重要。	第1回生活再建部会
○放射線量や気候が一番大きな問題。	第2回生活再建部会
○空間線量、気候風土、交通機関等を考えるべき。	〃
○すぐ帰ることが出来ないため、その間、自分達が住んでいた双葉町の暮らしに少しでも近づける場所が必要。双葉町は温暖な地であるため、気候条件の近い所に求めるべき。	第1回委員書面意見
○放射線のリスクが少なく雇用が確保され、生活基盤の立て易い地を求めるのが本来の姿ではないか。	〃
○放射能の詳細情報の提示	〃
○場所選定に当たり、①放射線量が低く子供・孫達が安心して生活できる、②暖かく雪が少ない、③交通の便が良い、④就職が確保できる、⑤教育が熱心で人材を育成できる、⑥病院・医者等が確保できる、⑦断層のないことを考慮してほしい。	〃
○放射線を感じることもなく、のびのびと暮らせる所が良い。	〃
【その他場所の選定に関する意見】	委員会/部会
○まずは仮の町の拠点を早く決めるべきではないか。そうすれば、どこに何を集中するか、分散するか否かの議論を進めることができる。	第2回生活再建部会
○時間がない中で、仮の町の場所の例示を挙げて議論しないと議論がいつまで経ってもまとまらないのではないか。	〃
○この委員会は来年3月までにとりまとめ、それを踏まえて町長と議会が協議して決めるのであって、ここで仮の町の場所の結論を出しても意味がない。	〃

○仮の町の場所については、現段階では議論を深めるが、具体的な場所を言うとそこを否定することにもつながるため、早めに結論を出すのは控えるべき。	〃
○具体的な場所の選定よりも、拠点設定の規模や放射線量の程度等町独自の基準を決めて町民に示すという方法もあるのではないか。	〃
○仮の町の基準については、それを解決したとの前提の下で集中型・分散型の議論をしていかないと、また議論が最初に戻ってしまう。	〃
○例えば、放射線量の基準についても我々が簡単に決め切れるものではないため、まずは仮の町の様々な課題に関して幅を持った議論をすることによって、最終的に結論を導いていくようにすればよい。	〃

2. 双葉町に存在した都市機能を振り返って、「仮の町」には最低限そろっていなければならない機能、そろっていることが望ましい機能は、それぞれどのようなものか。

【仮の町に必要な機能に関する意見】	委員会/部会
○仮の町に必要な都市機能は、最初からすべてを求めるのではなく、町が充実、発展していくにしたがって諸機能を充実、発展させていくような発想が必要。	第2回生活再建部会
○帰還の見通しもはっきりしない中で、仮の町の機能についても短期的ものと長期的なもので変わってくるのではないか。	〃
○町の構造物を造る上で耐用年数を考える必要があり、まず何年単位を想定するのかが必要。また、選定場所によって町民の集まり方は変わりうることに留意。	〃
○仮の町に神社が必要との意見について、心の拠り所となることから賛成。	〃
○仮の町で必要なものと言えば、鎮守の森ではないか。心の拠り所にもなるし、行事等を通じて家族が自然と戻ってくるような環境につながる。	〃
○祭り事は人々の心を結び付けるものであり、宗教施設は行政が口を出せない部分ではあるが、住民の希望で実現していくことも一案	〃
○仮の町について全てを満足させることは不可能なので、何を優先順位にすべきか議論すべき。	〃
○仮の町に必要な機能は、まず場所及び面積を決め、受入先の了承を得た上で、次の段階として住宅、福祉施設等を決めていってはどうか。	〃
○仮の町機能を加須から郡山地区に移す(分散型の場合は歩いていける場所を)。その際、大切な事は町民が安心して利用できる公共施設(菜園云々場などに利用・広い駐車場)を確保すべき。	第1回委員書面意見
○仮の町について、①町の仮の町機能をどこにするか早めに決定すること、②仮の町を作った場合に移住してくる人が何人いるのか、アンケート調査で正確な人数を把握すること、③その人数によって公共施設等をどうするか検討すればいい。	〃
○福祉施設について、利用者から特養の要望が多いことを受け、24年度第1回理事会にて今後益々少子高齢化が進むので施設は絶対必要ということで、町の復旧・復興に併せ事業再開することで可決・承認されている。	〃
○町の機能としては、教育施設、病院を核とした健康福祉施設、商業施設、働く場としての農工業施設、行政施設、交通弱者のための交通手段等々検討する必要あり。仮の町とは言いつても、生活の上では仮を感じさせないコンパクトシティであるべき。	〃
○官舎、小中学校、仮設住宅などある程度長期に耐える造りで集団移動できないのか、検討できないか。	第2回委員書面意見

3. 「仮の町」における住環境はどのようなものがよいか。

【住環境に関する意見】	委員会/部会
○仮設住宅で長い間住み続けるわけにはいかないのに、災害公営住宅などで、避難中の生活の質をより高めていくことも考えることが必要である。【再掲】	第2回委員会
○元気な人と高齢者が一緒に生活できるような、高齢者生活支援施設が併設した住宅の在り方もあってよい。	第2回生活再建部会
○災害公営住宅のイメージとして、単に住む場所の提供だけでなく、デイサービス・公民館・障害者が働くスペース等そこで人が集まり交流できる場所を併設するというアイデアは非常によい。	〃
○仮設住宅等の入居期限に合わせた次の段階の居住の在り方について早急に見通しを立てるべき。【再掲】	第3回生活再建部会
○仮設住宅の構造はそもそも長期居住を前提としていないため、早急に仮の町をつくって住環境を整備すべき。	〃
○集合住宅を造るのであれば、高齢者を考慮し5階建て以下であってもエレベーターを完備してほしい。	第2回ふるさと再建部会
○現状の仮設・借上げ住宅での厳しい住環境から、もっと広い住環境の場所への斡旋を行うべき。その救済方法として、茨城県つくば市の公務員宿舎への移住手続きを行政が率先して進めるべき。	第1回委員書面意見
○仮の町にかかる個人費用の提示、どのくらいの予算で住めるか？	〃
○今後、長期になる避難生活の中で高齢者対応施設の早期設置も重ねてお願いしたい。	第2回委員書面意見

4. 「仮の町」において、生業を再開し、雇用を創出していくためには、どのような支援が必要か。

【雇用・事業再開等に関する意見】	委員会/部会
○共同の作業場、共同の事務所など共同の施設をつくってスタートするという考え方もある。	第2回生活再建部会
○消費者がいけないことには、商売は再開できない。とにかく一つの拠点をつくって、そこに人を集めていくような流れをつくることも必要。	〃
○復興のためには若者の力が必要だと思うので、若者が戻って生活をできるような雇用が必要ではないか。	第1回委員書面意見
○失職した立場として「雇用の場」	〃
○「不地域(双葉町:これからの長い道のり)産業」・コミュニティビジネスの検討(就業支援、NPOその他法人化等も含めた長期的な対策、主体性・固有のビジネス起業化の検討)	第2回委員書面意見

●双葉町の教育の在り方について

1. 双葉町の学校の再開の意義についてどのように考えたらよいか。

例えば、

- ①避難先の学校に慣れてしまった子どもたちも多いという現実の中で、子どもたちや保護者の視点から、学校を再開する意義はどのようなものがあるか。
- ②双葉町の地域社会という視点から、学校を再開する意義はどのようなものがあるか。

【学校再開に関する意見① ～早急な学校再開を求める意見～】

	委員会/部会
○時間が経てば経つほど子どもたちはばらばらになってしまう。早く学校を再開したい。	第2回委員会
○何度も避難先を変えている子どもが学校に登校拒否になっていると聞いている。早くまとまった動きをしないと、一番かわいそうなのは子どもである。	第4回委員会
○仮の町と学校の再開は切り離して考えて、学校の再開やコミュニティをつくるのが急ぐべき問題。【再掲】	〃
○学校については、仮の町とは別に、たとえ通う生徒が少なくても一刻も早く再開すべき。	第1回生活再建部会
○学校再開の条件については、子供たちが集まるか否かで判断するのではなく、双葉の学校を必要とする子供がいるのなら、少人数であっても再開すべき。	〃
○子供たちも避難先での生活に慣れ、また、教員も他市町村へ流出している状況下で、町のシンボルとして少人数でもいいので一刻も早く学校を再開すべき。	第2回生活再建部会
○学校は双葉町の伝統芸能等を継承していく機関の一つであり、そうした観点からも学校の再開は必要。	第3回生活再建部会
○学校は町のシンボル、心の拠り所であり、双葉町の子供たちが共に学ぶ場所を確保することが必要。時間が経てば経つほど学校再開は難しく、時間との戦い。	〃
○双葉町への想いの強い子が残っているうちに、一刻も早く県内に1カ所でもいいから学校を立ち上げるべき	〃
○舞踊の伝承は双葉町として大事なこと。伝承していくことや長期的に子どもの育成を考えると、学校を再開しないことには始まらない。	第1回きずな部会
○このままでは双葉中、双葉南小、北小にしろ校歌が歌えない子どもが出てしまい、町としてもスピード感を上げないと、避難先の学校が母校になってしまう。	〃
○子供(親のニーズ)のために学校を再開するというスタンスで。時間が経てば経つほど新しい環境に慣れ、学校再開しても戻る児童は僅か。	第1回委員書面意見
○町の復興の大きな柱の一つは学校再開にあり、一日も早い学校再開を望む。	〃
○双葉町の集いがあり、集まった子供達の嬉しそうな様子を見ると、やはり心の拠り所となる双葉小中学校が不可欠ではないか。	〃
○学校再開について、スローガンだけに終わらさず、早急に方針・具体策を示すべき。同時に意向調査をきめ細かく行う必要あり(学校再開への要望がない場合もありえる)。	第2回委員書面意見
○学校再開については、時間との戦いであり、仮の町とは切り離して一刻も早く再開すべき。	〃

【学校再開に関する意見② ～避難先で馴染んだ子は避難先で生活をするべきとの意見～】

	委員会/部会
○子供たちも事故から1年以上経ち、それぞれの地域で馴染んでいるのであれば、進学等今後のことを考えても今の場所で生活を続けた方がいい。	第1回生活再建部会
○母親の立場から、子どもは小さい子ほど学校に馴染むのが早く、子どもたち自身も転校したくない、今の学校にずっといたいという話をよく聞く。	〃
○避難先に慣れてしまった子供たちには、その学校で力を発揮してもらい、双葉町のために何か頑張るといった教育は家庭でもらう以外にない。	第3回生活再建部会
○学校を再開する場合でも、大人の感覚で双葉の子どもたちをすべて集める必要はなく、避難先でうまく順応しているのであればその地域で活躍してもらえばよい。	〃
○子供を教育中の親より「子供達は避難先の学校に馴染んでいるので、高校卒業までこの地で教育を続けたい。その後福島に戻るかどうかは子供達に選択させたい。」との意見を聞いた。	第1回委員書面意見

【その他意見】	委員会/部会
○これまでの学校における自分たちの町や郷土についての学習や学校の通学路の経験について、震災以降そうした経験ができない子供たちに対してどのように行っていくかは、子供の生活再建という観点から重要な課題。	第5回委員会
○今後の進路を迷っている家庭はまだおり、学校が再開すれば、そこに行きたい子供はいるはずなので、そうしたニーズ把握のためにも町民アンケートを早急に行うべき。	第3回生活再建部会
○自分の娘は来年中学校だが、知らない先生よりは双葉の先生がいる中学校に行きたいという。	〃
○子どもたちは町の将来を担う宝であり、文化や芸術等我々が残したいいろいろなものを継承し、双葉町の町民として残ってもらえるように大事に育て上げる必要がある。	〃
○よき納税者を育てるとよく言うが、子供たちが双葉町に残らないとすると、町の存続にも関わる。	〃
○双葉町の人たちの教育に対する期待や誇りは、今後のまちづくりを進めていく上での重要な鍵、軸になる。	〃
○学校再開の議論をするには、仮の町の拠点の選定を議論してからでないと、一歩前に進めないのではないかと。また、親と子の繋がり・絆や町のコミュニティとの関係についても併せて考えるべき。	〃
○仮の町の拠点での学校教育に加えて、双葉の学校がない拠点の子供たちへの双葉教育をどうやって行っていくのかについても検討すべき。	〃
○県外の中学校から県内の高校に入学する際に十分な情報がなく苦労した経験から、何らかの行政支援が必要ではないか。	〃
○子どもたちの通う学校が必要なのはもちろんだが、双葉町の伝統・文化など、ものを伝える仕組みとしての学校も考えるべき。	第1回きずな部会
○仮設校舎や間借り校舎での授業は不自由があるが、不自由な中で工夫をしながら力を合わせて学ぶことは、より良い人間形成一助となる。また、少人数での授業は、多くの教師の手や目が行き届き手厚い個別指導が可能で学力向上に繋がる。	第1回委員書面意見
○小学生の息子も2度の転校を経験し、今も友人関係に悩んでおり、一刻も早くこの不安定な日々から脱却したい。	〃

2. 学校を再開しようとした場合に、どのように学校を再開させるべきか。
 例えば、
 ①どのような場所に学校を再開させるか。例えば、これからつくる「仮の町」か、現在の子どもたちが多い場所か、福島県内か県外か。
 ②再開する学校に多くの子どもたちを集めるようとするには、どのような学校・教育環境を整備すべきか。

【再開場所・再開方法等に関する意見】	委員会/部会
○将来的に町の拠点となり得る場所に、仮の町とは別に、学校を先に再開すべき。	第1回生活再建部会
○一刻も早く仮の町の拠点となりそうな場所で学校を立ち上げないと、双葉という名前の学校がなくなり、また、双葉で働いてくれる教員がいなくなってしまう。	第2回生活再建部会
○学校を再開するにしても月日が経ち多くの子供たちを集めるのが難しい中、避難先で馴染めないような子供たちを対象とした少人数教育が徹底できるような学校として、まずスタートさせることも1つの方法である。	第3回生活再建部会
○他の町でも少人数指導で実績を上げている例もあるため、そうした売りをPRできるような学校づくりを目指していくべき。	〃
○とにかく早く学校を立ち上げて、これからの双葉町を担う子供たちの教育をしっかりと行うとともに、多くの町民を集める流れをつくっていくべき。	〃
○放射能への不安を抱える町民のためにも、県内に加えて、県外での学校立上げがあってもよいのではないかと。	〃
○仮の町における学校再開を議論する場合、受入自治体との関係において、双葉郡としての一部協同組合や広域連合といった形での学校の必要性も議論する必要があるのではないかと。	〃
○郡立、組合立の学校についても、双葉町の心の拠り所・伝統の継承等の観点から、町民が発想を転換できるか否かが問題。	〃
○郡立の学校については、その理想は理解するものの、その実現可能性及び双葉町の文化風土等の継承の観点から反対。	〃

○広域連携で成功しているのは消防、ごみ、水道であるが、各町村の抱える事情が異なる中で、それ以外の分野では不可能。次の世代を担う子どもたちへの教育や文化の継承は、町が中心となって行うべき。	〃
○仮の町においてどのように学校を再開させるべきかについては、仮の町を受入自治体との協調の中でどのようにつくっていくのかということと連動している。	〃
○学校のみならずいろいろな分野での他町村との連携に関する議論の必要性について指摘が出てきたことについては、大切にしていけるべき。	〃
○学校再開場所については、仮の町が全く別の場所にできた場合の想定や、平成の大合併のような県を跨いだ市町村合併の事例も踏まえつつ、検討すべき。	〃
○再開する学校に双葉の子どもたちを集める方法として、全寮制の学校というのもあり得るのではないか。	〃
○福島県内では、廃校や廃墟になったホテルがあるので、そこを利用し、学校を再開したり、集まれる場所にしたりすることはできないのか。	第1回きずな部会
○学校の再開については、何らかの特色があり、指導方針等の理念がないと厳しい。	〃
○学校再開の候補地はいわき市が有力。但し、登校にはかなりのスクールバスが必要となり予算措置が必要。また、子供を集めるには中高一貫教育、IT、広域圏での設置等のメリットが必要。	第1回委員書面意見
○学校再開場所は、仮の町の予定地が望ましいが、無理であれば、今年度末に移動予定の県内に設置される町役場付近がふさわしい。また、双葉特区の様なものを県に要望し、小中連携による「学力の保障と進路の実現」を前面に出す施策をとることで人数を確保するのも一案。	〃

<p>3. 双葉町の学校ではなく、避難先の自治体の学校に引き続き通う子どもたちに対して、双葉町の子どもとしての意識、また子どもたち同士のきずなを維持させていくため、双葉町の子どもたちが日常的または定期的に集まれる場が必要ではないか。そうした場を双葉町の歴史・伝統・文化の継承の拠点として考えていくことも必要ではないか。</p>	
<p>【子どもたちのきずな維持に関する意見】</p>	委員会/部会
○子どもたちの絆を維持するための集いは、子どもたちは共に学んだから再会したいのであって、共に学んでいない子どもたちが集まるためには、相当なモチベーションがないと難しい。	第3回生活再建部会
○避難生活が長引けば避難先での生活スタイルも変わってくるため、双葉町の子どもたちの再会の集いでも避難先ごとに子どもたちが分かれてしまったと聞いている。再会の集いを実施する際にはこの点も工夫が必要。	〃
○子どもは大人と違い、短時間で心を開くので、絆をつくる手段を早急に考えなければならない。	第1回きずな部会

●「仮の町」に住まないと選択された方への支援について

1. 「仮の町」が条件に合わないなどの理由により、「仮の町」に住まないという選択をされる町民もいらっしゃるが、こうした町民に対して、双葉町としてどのような支援が必要となるか。

基本的な行政サービスは避難先の自治体から受けることが可能となっているが、例えば、情報提供や健康管理など双葉町独自の行政サービスについて、どこの町に避難していても継続して行っていく必要があるものはどのようなものがあるか。

【仮の町に住まないと選択した町民への支援に関する意見】

委員会/部会

○仮の町をつくってほしいとの要望は多くあると思うが、既に各地で生活を始め、戻りたくても戻れない人も出てくる。そのような人たちをどのように考慮するかは課題。

第1回委員会

○仮の町は一つの選択肢ではあるが、それだけでは済まされない。自力建設を選択した町民への補償問題など、現状の制度的な枠組みの問題点を明らかにしながら、具体的な戦略について考えていかないといけない。【再掲】

第2回委員会

○生活再建の流れで、仮の町に行く、行かない、今どこに住んでいようと、今後ここに住もうと自由だと思う。しかし、居住する自治体の行政サービスを受けるのならば何らかの負担は必要で、いつまでも恩恵のみを預かるのはいけない。【再掲】

第3回委員会

○仮の町の拠点をつくるのと同時に、様々な事情でそこに集まり切れない人たちに対して、どのように双葉町の絆を継続していくのかという仕掛けが重要。

第3回生活再建部会

○全国に避難している町民の孤立化を防ぐためにも、町民がある程度の規模で居住する拠点には、町民同士が集まっておしゃべりしたり、情報を共有できる心の拠り所となるような場所が必要ではないか。

〃

○仮の町に戻らないパターン、現在いる場所に定住する場合の補助等

第1回委員書面意見